

「新型うつ病」問題に対する私見 ——中嶋論文を読んで——

高岡 健

<索引用語：新型うつ病，逃避型うつ病，現代型うつ病，
ディスチミア親和型うつ病，非定型うつ病>

<Keywords：new type of depression, avoidant type of depression, present-day type of depression, dysthymic type of depression, atypical depression>

中嶋⁷⁾は、逃避型抑うつ・現代型うつ病・ディスチミア親和型うつ病の三類型を、いずれも逃避の特徴をもつ抑うつ体験反応であると結論づけた。私は森山⁵⁾のいう人間観念の三領域論（統合失調症を共同幻想障害に、躁うつ病を個別的幻想障害に、てんかん・解離を対幻想障害に理念的に対応させる考え方）と病前性格論に基づき、「新型うつ病」の位置づけに関する異見を提出する。

第一に、逃避型抑うつの主体-病前性格は、過保護もしくは放任されて育った若者が、「体面を保ちたいという願望・プライド」をもちつつ「そつがなくスマートな遊びもできる」というものである¹⁾。これらは、他者からの評価を意識しながら自己を位置づけるという主体のあり様にほかならない。かかる病前性格の持ち主が形勢不利とみるや抑うつに逃避するのは、過度な自責を回避するための手段であると考えられる。同様に、現代型うつ病の主体-病前性格は、「ひっそりと自分のペースでやれるようなものがある⁴⁾」という患者の言葉に象徴される。これは、自分の生き方を手放さないという点に固執するほかには主体を保ちえないことを意味する。だから、彼らは挫折を恐れるのである。このように、逃避型抑うつおよび

現代型うつ病は、自己が自己にかかわる領域に生ずるものであるという点ではメラニコリー型うつ病と同じであり、ただHiatusを眼前にして逃避するか、遙か手前で挫折を恐れるかの違いがあるだけといえよう。

第二に、ディスチミア親和型うつ病の主体-病前性格は、自己自身（役割抜き）への愛着、規範に対してストレスであると抵抗する、秩序への否定的感情と漠然とした万能感というものである⁸⁾。これらの特徴に関して、永田⁶⁾は分裂気質の特性であり、自己対世界という構えの言い換えに過ぎないと述べている。もっとも、樽味⁸⁾は、自験例を呈示するにあたり、分裂病質人格障害の診断基準（DSM-IV）は満たしていないと記している。しかし、DSM-IVの分裂病質人格障害が、Kretschmerのいう過敏性と鈍感性の並存やMinkowskiの内閉的活動性と似て非なるものであることは、つとに指摘されている^{4,6)}。一方、加藤²⁾は、樽味⁸⁾が記載したディスチミア親和型うつ病を有する公務員の例について、上司からの叱責が抑うつの端緒となり、この体験が病態の中核に位置している可能性があることに鑑みるなら、父性的他者との出会いによる状況神経症であり、脆弱な自己愛へのしがみつきを特徴とする神経症性抑うつとみることができると述べている。しかし、「うるさい上司がいて顔を見るのが嫌だった」という陳述は分裂気質者の陰性感情⁶⁾の反映にほかならず、欠勤は過敏性と鈍感性の並存ゆえと考えることができる。また、欠勤して「パチンコをするときに少し元気は出る」のは、内閉的活動性に相当すると考えられる。ちなみに、松浪⁴⁾も、現代型うつ病とは別に、分裂気質者が呈する適応不全状態がありうるとして、医療事務職員の症例を呈示している。こうしてみると、自己が世界とかかわる領域での齟齬が、追跡妄想に

までは至らない水準で病像を形成したとき、ディスチミア親和型うつ病が発現するといえよう。

第三に、非定型うつ病の原型である hysteroid dyspholia の主体-病前性格は、外部の人から高く評価されることを常に求めるなど、ヒステリーに類似すると考えられてきた³⁾。すなわち、自己が特定の他者とかがかわる領域での確執は、それが転換・解離症状の水準にまで至らない段階であれば、対人関係における気分反応性といった非定型うつ病の病像にとどまると考えられるのである。

まとめるなら、「新型うつ病」と呼ばれるものには、個的幻想領域に出現する逃避型抑うつと現代型うつ病、共同幻想領域に出現するディスチミア親和型うつ病、そして対幻想領域に出現する非定型うつ病が含まれる。これらはそれぞれ、メランコリー型うつ病、統合失調症、ヒステリー(転換・解離)の軽症型/不全型として位置づけることができる。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 広瀬徹也:「逃避型抑うつ」について、躁うつ病の精神病理 2 (宮本忠雄編)。弘文堂、東京、p.61-86, 1977
- 2) 加藤 敏:職場結合性うつ病。金原出版、東京、2013
- 3) Liebowitz, M. R., Klein, D. F.: Hysteroid dyspholia. *Psychiatric Clinics of North America*, 2; 555-575, 1979
- 4) 松浪克文, 大前 晋:内因性うつ病とパーソナリティ-現代型うつ病(恐怖症型うつ病)と分裂気質者の呈する内因性うつ病像一。精神科治療学, 14; 729-738, 1999
- 5) 森山公夫:躁と鬱。筑摩書房、東京、2014
- 6) 永田俊彦:「分裂気質」概念の現代的意義。精神科治療学, 23; 695-699, 2006
- 7) 中嶋 聡:「逃避型抑うつ」(広瀬)・「現代型うつ病」(松浪)・「ディスチミア親和型うつ病」(樽味)の診断学的検討-「新型うつ病」問題への一寄与。精神経誌, 116; 370-377, 2014
- 8) 樽味 伸, 神庭重信:うつ病の社会文化的試論-特に「ディスチミア親和型うつ病」について-。日社精医誌, 13; 129-136, 2005